

01  
リズムに乗って  
の

## 『いろはうた』

①

弘法大師 空海？  
こうぼうだいし くうかい

いろはにほへと  
ちりぬるを  
わかよたれそ  
つねならむ  
うみのおくやま  
けふこえて  
あさきゆめみし  
ゑひもせす

昔の子どもたちが、ひらがなを覚える際に用いた題材です。

リズムが良く、空海が作ったと言われるほど広まりました。

「ゑ」は「うい」、「ゑ」は「うえ」と読むと、今の子どもも喜びます。

『いろはに金平糖』  
いろはに 金平糖  
金平糖は 甘い  
甘いはお砂糖  
お砂糖は 白い  
白いは 兎  
兎は 跳ねる  
跳ねるは 蛙  
蛙は 青い  
青いはお化け  
お化けは 消える  
消えるは 電気  
電気は 光る  
光るは 親父の 禿げ頭

「いろはうた」の冒頭をもじった、リズムカルな替え歌です。

子どもたちも中身をアレンジして音読することがあるでしょう。

ことばの連想や、主語と述語の関係を学ぶのにも適しています。

『付け足し言葉』

驚き 桃の木 山椒の木

あたりき 車力よ 車引き

蟻が 鯛なら 芋虫や 鯨

嘘を 築地の 御門跡

恐れ 入谷の 鬼子母神

おっと 合点 承知之助

その手は 桑名の 焼蛤

何か 用か 九日 十日

何が 南京 唐茄子 南瓜

もっとも安定していると言われる4拍子のリズムでできています。

リズムにのって、軽快に読みましょう。

十 九 八 七 六 五 四 三 二 一

『数かぞえ歌』

無花果

人参

山椒に

椎茸

牛蒡に

無串子

七草

初茸

胡瓜に

冬瓜

数を唱えるように、リズムカルに読みましょう。

クラスで行うときは、カスタネットなどでリズムを取ると良いでしょう。

# 『春の七草』

① 芹 せり

② 薺 なずな

③ 御形 ごぎょう

④ 繁縷 はこべら

⑤ 仏の座 ほとけざ

⑥ 菘 すずな

⑦ 蘿蔔 すずしろ

これぞ七草  
ななくさ

リズムカルに読んで覚えましょう。

まず覚えることで、七草そのものへの知識や興味関心へと転移するはずですよ。

# 『秋の七草』

① 萩の花 はぎはな

② 尾花 おばな

③ 葛花 くずばな

④ 瞿麦の花 なでしこはな

⑤ 女郎花 おみなえし

また⑥ 藤袴 ふじばかま

⑦ 朝貌の花 あさがおはな

山上憶良 やまのうえのおくらの



こちらも読んで、真っ先に覚えましょう。

名前を覚えることで、植物への興味の「アンテナ」が伸びることでしょう。

# 『初恋』

①

島崎 藤村  
しまざき どうそん



まだ あげ初めし 前髪まえがみの  
 林檎りんごのもとに見えしとき  
 前にさしたる 花櫛はなぐしの  
 花ある 君きみと 思ひおもひけり  
 やさしく 白しろき 手てを のべて  
 林檎りんごを われに あたへしは  
 薄紅うすくれなの 秋あきの 実みに  
 人ひとこひ 初めはつこいし はじめなり

こちらも暗唱あんしょうの定番ていばん。ここでは、リズムカルに読みましょう。

なお、後半ページに初恋②はつこいが載っています。慣れたら朗読ろうどくに挑戦ちようせんを。

# 『山のあなた』

カール・ブツセ

上田 敏 訳  
うえだ びん やく



山の あなたあなたの 空そら 遠とおく  
 「幸さいわい」 住すむと 人ひとの いふ。  
 噫ああ、 われ ひと、 尋とめゆきて  
 涙なみだ さしぐみ、 かへりきぬ。  
 山の あなたあなたに なほ 遠とおく  
 「幸さいわい」 住すむと 人ひとの いふ。

暗唱あんしょうの定番ていばん中の定番ていばん。

上田敏の名訳めいやくにより、本国ほんこくよりも有名ゆうめいになったほどです。

『汚れつちまつた悲しみに……』

中原 中也  
なかはら ちゆうや

①

汚れつちまつた 悲しみに

今日も 小雪の 降りかかる

汚れつちまつた 悲しみに

今日も 風さえ 吹きすぎる

汚れつちまつた 悲しみに

たとえば 狐の 革裘

汚れつちまつた 悲しみに

小雪の かつて ちぢこまる

促音の「っ」が小気味よいリズムを生みます。

「k」や「ch」の子音を飛ばして読むのも楽しいでしょう。

『サーカス』

中原 中也  
なかはら ちゆうや

①

幾時代かが ありまして

茶色い 戦争 ありました

幾時代かが ありまして

冬は 疾風 吹きました

幾時代かが ありまして

今夜此処での 一と殷盛り

今夜此処での 一と殷盛り

サーカス小屋は 高い 梁

そこに 一つの ブランコだ

見えるともない ブランコだ……

教科書によく登場する詩です。ここではリズムカルに読みましょう。

「ゆあーんゆよーん」は後半のページで。



# 『梁塵秘抄』

りょうじんひしやう

後白河法皇  
ごしろかわほうおう

編

遊びをせんとや生れけむ、  
あそぶをせんとやうまうまれけんむ、

戯れせんとや生れけん、  
たわぶれせんとやうまうまれけん、

遊ぶ子供の声きけば、  
あそぶこどもこゑきけば、

わが身さへこそ動がるれ  
わがみさへこそうごかるれ

大河ドラマにも登場した有名な歌。  
たいがどうじやうゆうめいうた

子どもたちが音読する声を聞けば、こちらの心も動きます。  
こおんどくこゑきこころうご



# 『太平記』

たいへいき

①

小島法師  
こじまほうし

落花の雪に踏み迷ふ、  
らつかゆきふみまよふ、

交野の春の桜狩り、  
かたはるさくらがかり、

紅葉の錦を衣て帰る、  
もみじにしきさきかえ

嵐の山の秋の暮。  
あらしやまあきくれ

太平記の名場面にして、暗唱の定番。  
たいへいきめいばめんあんしやうていばん

音の響きやリズムを楽しみましょう。  
おとひびたの

隣の2つの題材も、「見た目は難しく、読むとカンタン」の典型です。  
となりだいがいみめおずかよてんけい



# 『曾根崎心中』

①

近松門左衛門



この世の名残り、夜も名残り。

死にに行く身をたとふれば

あだしが原の道の霜。

一足づつに消えて行く

夢の夢こそ哀れなれ。

これも暗唱の定番の一つ。

顔を踏んだ、美しい響きを楽しみましょう。

# 『弁天娘女男白浪』

①

(白浪五人男)

河竹黙阿弥



知らざあ言って聞かせやしよう。

浜の真砂と五右衛門が、

歌に残せし盗人の、

種は尽きねえ七里ヶ浜、

その白浪の夜働き、

以前をいやあ江の島で、

年季勤めの見ヶ淵。

百味講で散す蒔錢を、

当てに小皿の一文子、

百が二百と賽錢の、

くすね錢せえだんだんに。

七五調でできた、暗唱の定番。

4拍子のテンポで、リズム良く読みましょう。



# 『重言』

じゅうげん

いにしへの

昔の武士の侍が

山の中の山中で

馬から落ちて落馬して

女の婦人に笑われて

赤い顔して赤面し

家に帰って帰宅して

仏の前の仏前で

短い刀の短刀で

腹を切って切腹した

「頭痛が痛い」のように、本来、誤ったことばの用い方である「重言」。

それを次々と重ねることで面白おかしく歌にしたものです。

# 『嫌い箸』

①

小橋好代



涙箸	空箸	立て箸	刺し箸
舐り箸	寄せ箸	横箸	指し箸
渡し箸	移り箸	迷い箸	探り箸

箸の禁忌手「嫌い箸」。

こんなにたくさん？ いえいえ、まだ続きがあります。

『人を動かす』

山本 五十六



やってみせ 言いって聞きかせてやさせてみせ

ほめてやらねば 人ひとは動うごかじ

話はなし合あい 耳みみを傾かたむけ 承しょう認にんし

任まかせてやらねば 人ひとは育そだたず

やっている 姿すがたを感かん謝しゃで 見み守まもって

信しん頼らいせねば 人ひとは実みのららず

山本五十六の有名な「やってみせ…」。

繰り返し唱え、体に染み込ませたい名文です。

『竹』

③

萩原 朔太郎



かたき 地じ面めんに 竹たけが 生はえ、

地ち上じょうに するどく 竹たけが 生はえ、

まつしぐらに 竹たけが 生はえ、

凍これる 節ふし節ぶしりんりんと、

青あお空ぞらの もとに 竹たけが 生はえ、

竹たけ、 竹たけ、 竹たけが 生はえ。

子音を強調して、勢いよく読みましょう。

そうすることで、自然と竹の若さや力強さが伝わります。

# 『浮雲』

二葉亭 四迷



口髭、  
頬髯、  
顚の鬚、

暴に興起した  
拿破崙髭に、

狎の口めいた  
比斯馬克髭、

そのほか  
矮鷄髭、  
貉髭、

ありやなしやの  
幻の髭と、

濃くも淡くも  
いろくに生分る。

4 拍子で相づちをうつように、テンポ良く読みましょう。  
拍子が崩れやすい後半も、リズムに乗せてみせましょう。

# 『寿限無』

寿限無 寿限無

五劫の擦り切れ

海砂利 水魚の

水行末 雲来末 風来末

食う寝る処に住む処

藪柑子のぶら小路

パイポパイポパイポの

シューリンガンシューリンガンの

グリーンダイグリーンダイの

ポンポコピーのポンポコナーの

長久命の長助

勢いそのままに、リズムカルに、すばやく読みましょう。  
読み方によっては、途中リズムが変わってきますが、  
勢いに任せ読むことが何より大事。

『雨ニモマケズ』①

宮沢賢治

雨ニモマケズ

風ニモマケズ

雪ニモ夏ノ暑サニモマケヌ

丈夫ナカラダヲモチ

慾ハナク

決シテ瞋ラズ

イツモシヅカニワラツテ申ル

説明が要らないくらい有名な詩。

やや長いので、小分けにしています。まずは①を覚えましょう。



『落葉』①

ヴェルレーヌ

上田敏訳

秋の日の

ギオロンの

ためいきの

身にしみて

ひたぶるに

うら悲し。

五・五・五で続く詩です。

三連ずつ読むとテンポ良く読めるでしょう。



# 『落葉松』

①

一

北原 白秋  
きたはら はくしゅう



からまつの 林を はやし 過ぎて

からまつを しみじみと み 見き。

からまつは さびしかりけり。

たびゆくは さびしかりけり。

二

からまつはやしの 林を い 出でて、

からまつはやしの 林に い 入りぬ。

からまつはやしの 林に い 入りて、

また ほそ 細く みち 道は い つづけり。

五七、五七で続く詩です。  
ごしち ごしち つづ し

五七調で読むと読みやすいでしょう。  
ごしちちよう よ よ

# 『道程』

高村 光太郎  
たかむら こうたろう



僕の まへ 前に道はない

僕の うし 後ろに道は出来る

ああ、自然よ しぜん

父よ ちち

僕を ひとりだ 一人立ちにさせた こうだい 広大な ちち 父よ

僕から はな 目を離さないで まも 守ることをせよ

常に ちち 父の きはく 気魄を ぼく 僕に み 充たせよ

この とお 遠い どうてい 道程のため

この とお 遠い どうてい 道程のため

散文の詩が登場です。  
さんぶん し どうじょう

先のページの勢いそのままに。  
さき いきお

『亡弟子智泉が爲の達観の文』

弘法大師 空海



哀なる哉、哀なる哉。  
 哀なる中にも哀なり。  
 悲しき哉、悲しき哉。  
 悲の中の悲なり。  
 覺の朝には夢虎無く、  
 悟の日には幻象莫し  
 と云ふと雖も、  
 然れども猶、  
 夢夜の別れ  
 不覺の涙に忍ばれず。

哀しく、しかし美しい名文です。  
 悲しくも優しい響きにぐいと引き込まれてしまいます。

『平家物語』

①

語り手 琵琶法師



祇園精舎の鐘の聲、  
 諸行無常の響きあり。  
 娑羅双樹の花の色、  
 盛者必衰の理をあらはす。  
 おごれる人も久しからず、  
 唯春の世の夢のごとし。  
 たけき者も遂には滅びぬ、  
 偏に風の前の塵に同じ。

暗唱と言え、平家物語。  
 ここでは、スピーディーに読みましょう。